

《開幕》

「建築の日本展:その遺伝子のもたらすもの」同時開催プログラムのご案内

会期：2018年4月25日(水)－9月17日(月) 会場：森美術館(六本木ヒルズ 森タワー53階)



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション007:見えない都市

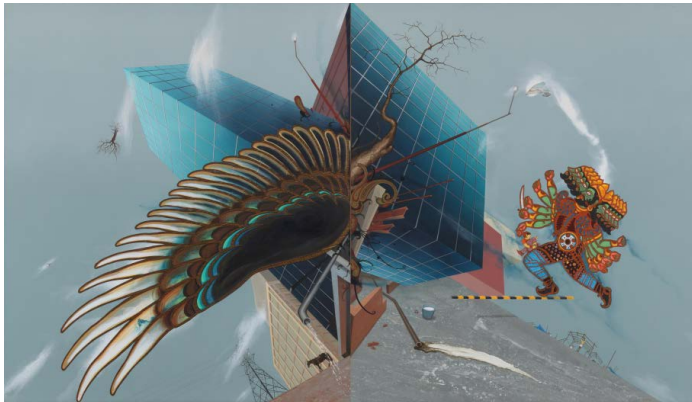
企画：椿 玲子(森美術館キュレーター)

出展作家：イ・ブル、ジャガンナート・パンダ、黒川紀章

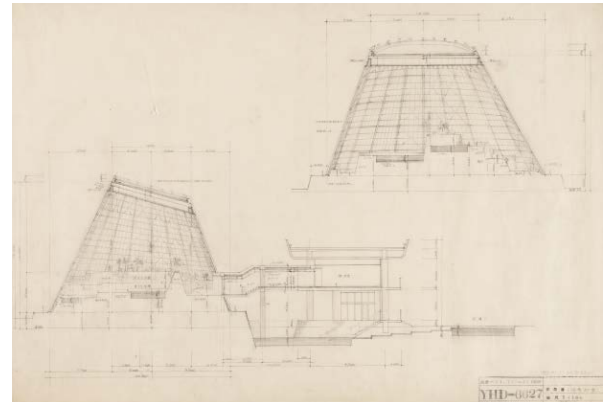
本展のタイトル「見えない都市」は、イタロ・カルヴィーノの小説のタイトルを引用しています。この小説は、マルコ・ポーロが元の初代皇帝フビライ・ハンに対して、旅先で見聞した数々の驚くべき都市の様相について語るフィクションです。

人間は常に理想の社会を思い描いてきました。建築や都市は、そうした夢の一部が現出したものとも言えます。しかし、現実には、建築や都市は災害により崩壊し、時を経て廃墟化し、いつかは遺跡となる可能性を孕んでいます。すなわち理想の社会とは、実現されないからこそユートピアであり続けるとも言えるでしょう。さらにインターネットによるコミュニケーションが一般化した現代においては、建築や都市は物理的な空間を超えてネットワーク状に生成され、従来の概念では捉えきれない存在になりつつあるともいえます。

ロシア・アヴァンギャルドを彷彿とさせつつも、エスペラント語の言葉がネオンとして輝くユートピア建築のようなイ・ブルの《朝の曲》。急速なグローバル化の中で、高層のハイテク建築が神話や動植物と一体化し、新種の生命体となった都市を表現するジャガンナート・パンダの《叙事詩 III》。建設から5年足らずで撤去されるという儚い運命をたどった、黒川紀章のメタボリズム建築《山形ハイドリームランド》。本展で紹介するこれら3つの作品は、人間の理想と夢の軌跡としての建築や都市について、観る者に考察を促す機会を与えてくれることでしょう。



ジャガンナート・パンダ
《叙事詩 III》
2010年
アクリル、布、接着剤、キャンバス
229 × 396 cm



黒川紀章
《山形ハイドリームランド》浴場断面詳細図 1:100
1966年頃
鉛筆、トレーシングペーパー
55 × 80cm

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、^{たかぎ}都木、村田
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22同和ビル

MAM
SCREEN

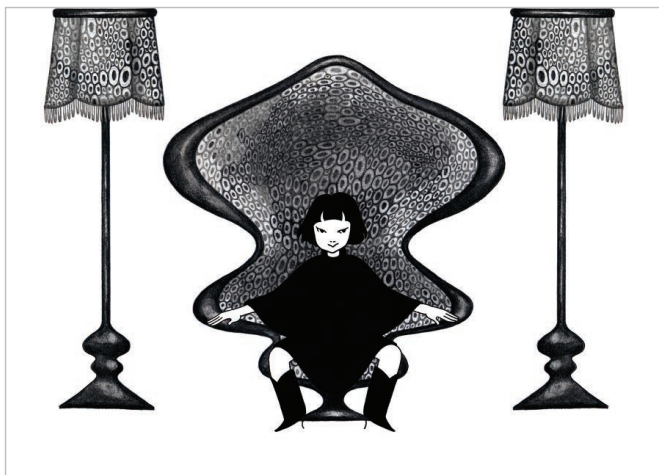
MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりの
シングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン008：近藤聡乃

企画：荒木夏実（東京藝術大学 准教授）

ニューヨークを拠点に活動する近藤聡乃（1980年生まれ）は、マンガ、アニメーション、ドローイング、油彩画、エッセイなど、多様な手法を用いて独特の表現世界を築いてきました。近藤の描く世界は、自身の経験や記憶、感覚に基づいた、虚実が入り混じった夢のような印象を与えます。原初的な記憶、女性特有の身体の変化、人と自然が混然一体となる環境、興味と恐怖のはざまにある感覚など、潜在意識を暴くかのような妖しい魅力を湛えた作品は、国内外で高く評価されてきました。

すでにマンガ家としてデビューしていた近藤は、多摩美術大学在学中に「マンガを動かす」という発想でアニメーションの制作を始めます。音楽と動きを伴うその手法は、近藤の表現に広がり可能性を与えました。本展では、これらのアニメーション作品3本とともに、初の試みとして短編マンガをスライドショーの形式で発表します。紙をめくる感覚とは一味違う、新たなマンガ体験をお楽しみください。



《電車かもしれない》2001-02年 アニメーション 3分56秒
音楽：知久寿焼 Courtesy: Mizuma Art Gallery



《てんとう虫のおとむらい》2005-06年 アニメーション 5分38秒
音楽：知久寿焼 所蔵：森美術館

上映作品

※当プログラムは約30分で、毎時00分と30分から上映を開始いたします。

※企画展・プログラム等実施のため、「MAMスクリーン」の上映のない時間帯があります。詳細は、森美術館ウェブサイトをご覧ください。www.mori.art.museum

映像作品

《電車かもしれない》	2001-2002年	3分56秒
《てんとう虫のおとむらい》	2005-2006年	5分38秒
《KiyaKiya》	2010-2011年	6分39秒

マンガ作品

※スライドショー形式で紹介

《タンスの少年》	2005/2018年	3分7秒
《まちあわせ》	2005/2018年	3分7秒
《夢の浮橋》	2015/2018年	5分40秒

近藤聡乃

1980年千葉県生まれ。2003年多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。2008年よりニューヨーク在住。森美術館では「ゴー・ビトゥーンズ 展：こどもを通して見る世界」(2014年)に出品。主な個展に「KiyaKiya」(ミヅマアートギャラリー、2011年)、主な出版物に『いつものはなし』(青林工藝舎、2008年)、『近藤聡乃作品集』(ナナロク社、2013年)、『ニューヨークで考え中①②』(亜紀書房、2015年/2018年)、『A子さんの恋人①～④』(KADOKAWA、2015～2017年)など。

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原^{たかぎ}、都木、村田
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル



MAMプロジェクトは森美術館が世界各地のアーティストと
実験的なプロジェクトを行うシリーズです。

MAMプロジェクト025：アピチャップン・ウィーラセタクン+久門剛史

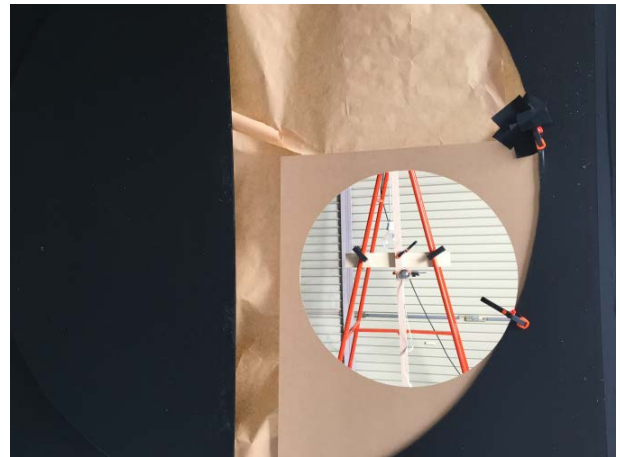
企画：徳山拓一（森美術館アソシエイト・キュレーター）

映画監督としても国際的に活躍するアーティスト、アピチャップン・ウィーラセタクン（1970年タイ・バンコク生まれ）と、近年活躍が目覚ましい久門剛史（1981年京都生まれ）のコラボレーションにより制作された、新作映像インスタレーション《シンクロニシティ》を紹介します。

本作は、アピチャップンが南米のコロンビアを舞台に製作している新作映画《メモリア》（2019年公開予定）に関連した作品で、深層心理学や脳神経学を参照しながら、個人の記憶と、社会や国家などの集合的な記憶の対比を題材としています。久門がタイのチェンマイにあるアピチャップンのスタジオに滞在し、脚本の構想段階からアイデアを共有するなどして共同制作をしてきました。2人のアーティストが互いに影響し合いながら、対話的なプロセスから生まれた実験的な本作は、鑑賞者の想像力を掻き立てる刺激的なものとなることでしょう。



アピチャップン・ウィーラセタクン
《シンクロニシティ》制作風景、2018年
Courtesy: Kick the Machine Films



久門剛史
《シンクロニシティ》制作風景、2018年

アピチャップン・ウィーラセタクン

1970年タイ・バンコクに生まれ、タイ東北部イサーン地方コーンケンで育つ。チェンマイ在住。タイを代表する映画監督でありアーティストでもある。長編映画『ブンミおじさんの森』で2010年カンヌ国際映画祭最高賞（パルムドール）受賞。森美術館では、アーティストのチャイ・シリと協働で制作した作品で「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」（2017年）に出展している。

久門剛史

1981年京都生まれ、在住。身の周りの様々な現象や歴史的事象を調査し、それらを人工的に作り出す音や光、風などを用いて、劇場的空間に再現するインスタレーションや立体作品などを発表している。近年の主な展覧会に、個展「MoCA Pavilion Special Project Tsuyoshi Hisakado」（上海当代芸術館、2016年）、あいちトリエンナーレ2016がある。2016年には世界各国で上演されたチェルフィッチュ『部屋に流れる時間の旅』の舞台美術を担当するなど活躍の場を広げている。

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：津原、^{たかぎ}都木、村田
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル